

## 根源的自己肯定感を育む（その1）

－『論語』と『老子』からみる内容項目「よりよく生きる喜び」の道徳科授業等の改善－

北村 博

### 【要旨】

令和元年度と2年度の2年間、麗澤大学大学院学校教育研究科道徳教育専攻で自己肯定感に関する研究に取り組んだ。研究の課題は、諸富の「実存的自己肯定感」をより明確にすることであった。その結果、諸富は「実存的自己肯定感」をフランク心理学の「創造価値」「体験価値」「態度価値」の3つの価値と関連付けて、より明らかにした。類義語として教育再生実行会議から示された「絶対的な自己肯定感」の定義も明らかにした。「実存的自己肯定感」と「絶対的な自己肯定感」を子供の発達段階から鑑みて、筆者は「根源的自己肯定感」の定義を提言する。

さらに、「根源的自己肯定感」を基盤にして、『論語』と『老子』のそれぞれの出典を改めて読み解いていく。その結果、『論語』と『老子』は「根源的自己肯定感」を育む教材に適していると提言するとともに、「よりよく生きる喜び」の道徳科授業等の改善を図る。

### キーワード：

実存的自己肯定感 絶対的な自己肯定感 根源的自己肯定感 『論語』と『老子』  
よりよく生きる喜び

## 第1章 問題の所在と研究目的

自己肯定感の概念整理の1つの「実存的自己肯定感」について、明治大学の諸富祥彦教授は、「自分の醜いところや、人を恨んだり、妬んだりする気持ちも含め、ただそのまま、あるがままに認めることができる自己受容に伴って生じる肯定的感覚」と捉えている。

筆者は以前、この自己肯定感の考えを基にして、よりよく生きる喜びと、『論語』『老子』の関係性を論じるとともに、『論語』と『老子』の思想から自己肯定感を基にする教材開発を行い、都内の小学校6年生120名の児童と授業を実践し、自己肯定感の高い傾向児童、低い傾向児童へのよりよい道徳科授業等の提言を行ってきた。<sup>1</sup>

しかし、諸富がいう「実存的自己肯定感」とは何かをさらにより明確にする必要がある。そのために、諸富はフランク心理学の自己肯定感を挙げていたが、筆者もまた、これからの課題として、このフランク心理学を挙げることにする。

そこで、本稿ではフランク心理学から「実存的自己肯定感」を明らかにしたい。また、類義語に一般社団法人「日本セルフエスティーム普及協会」が提起している「絶対的自己肯定感」がある。本稿では、これらの「実存的自己肯定感」と「絶対的自己肯定感」を整理することによって、筆者が唱える「根源的自己肯定感」を提言したい。その上で、道徳科内容

<sup>1</sup> 北村 博 自己肯定感を育てる－『論語』と『老子』からみる「よりよく生きる喜び」の道徳科授業等を通して－ 麗澤大学大学院修士論文、2021年3月

項目である「よりよく生きる喜び」との関係性、『論語』と『老子』の思想を基にして開発した2つの教材「失敗から生きる喜びへ」と「自分の弱さを見つめて」を再考する。

なお、本稿は筆者の令和元、2年度の修士論文を参考にして、論を展開したものである。

## 第2章 実存的自己肯定感と絶対的自己肯定感を補い合う根源的自己肯定感とは

### 第1節 実存的自己肯定感

明治大学の諸富祥彦教授は、「実存的自己肯定感」をヴィクトール・フランクル（1905～1997）から学んでいる。オーストリアのウィーンに生まれたフランクルは、アドラーやフロイトに師事し、精神医学を学んだ。フランクルのロゴセラピー理論は1942年に強制収容所のテレーゼンシュタットに収容される時点でほぼ完成しており、収容所体験が彼の理論の正当性を検証した。

フランクルは、3つの価値領域を挙げている。1つ目は「創造価値」である。「何かを活動することによって、創造し、実現された価値のこと」である。2つ目は「体験価値」である。「自然、芸術、人との関わり、人への奉仕等の様々な体験を通して実現される価値のこと」である。3つ目は「態度価値」である。「自分自身ではどうしようもない状況、変えることのできない運命に直面した時、その窮状に対してとる態度によって実現される価値のこと」である。フランクルの3つの価値を諸富は「実存的自己肯定感」といっている<sup>2</sup>。

しかし、筆者は、コロナ禍や自然災害等は「態度価値」と関連付けられるが、幼少期の子供には「創造価値」や「体験価値」を意識して実感できるだろうかと疑問をもつ。子供自身が様々な関わりから実感を通しての、もっと根源的な自己肯定感がないだろうか。

### 第2節 絶対的な自己肯定感

一般社団法人「日本セルフエスティーム普及協会」の工藤紀子代表理事は、教育再生実行会議第十次提言を受けて、自己肯定感の3つの概念を以下のように整理している。<sup>3</sup>

自己肯定感の概念	●自己の何を肯定するのか	●何によって自己肯定感が生じるか
①他者評価等に基づく社会的自己肯定感	●自らの努力や能力、成果 勉強やスポーツ等を通して他者と競い合ったり、自らの力の向上に向けて努力したりすることで得られる達成感や評価などを肯定的に受け止めることで育まれる。	●他者からの肯定的な評価や他者との比較 他者から褒められたり、認められたりして成功体験を積むことで育まれる。

<sup>2</sup> 諸富祥彦著『フランクル心理学入門 どんな時も人生には意味がある』コスモス・ライブラリー 2013年 112-113頁

<sup>3</sup> 一般社団法人「日本セルフエスティーム普及協会」『自己肯定力認定トレーナー養成コース』同会発行 2021年 7頁 教育再生実行会議第十次提言について 内閣官房教育再生実行会議担当室

<p>②自己受容に基づく自己肯定感</p>	<p>●長所のみならず短所も含む 自分を十分に客観視できるようになった段階において短所も含めた自分らしさや個性を冷静に受け止めることで育まれる。</p>	<p>●自身による受け止め 自分のアイデンティティに目を向けることで身に付けられる。</p>
<p>③絶対的な自己肯定感（自己肯定感の土台）</p>	<p>●自らの全存在 親から理解されている、愛されているという感覚。または親や親に代わる存在から愛情を受けることが絶対不可欠。</p>	<p>●保護者からの愛情 親からの愛情を受け、自分が無条件に受け入れられているという経験を積み重ねていく中で、子供が自らの全存在を肯定していくことで育まれる。</p>

ここで押さえてたいのは、①の「社会的自己肯定感」は、親や教師、友達、身の周りの人たちからの影響が大きい。他者の評価で得た自信や意欲等であるこの社会的自己肯定感を支えにしていた人が、この支えを失ったら土台が崩れ、生きる価値がない等と捉えることが多い傾向にある。②の自己受容に基づく自己肯定感、失敗や短所も自分の個性として受け入れるよさがある。一番大切にしたいのは、③の自己肯定感の土台である「絶対的な自己肯定感」である。信頼関係の土台といってもよい。工藤は、この絶対的な自己肯定感を育むために、「存在承認」が大切であるという。つまり、今、ここにいる大切な我が子の存在をありのまま、あるがまま、そのままを承認することである。この土台の上に、②の「自己受容に基づく自己肯定感」が育まれる。さらに工藤はプロセスを大切にする「行動承認」、成果や才能、目標達成を認める「結果承認」があるという。承認には3つの種類があり、「存在承認」を大切にしながらバランスよく正しい承認をすることで、本人（子供自身）が自分を受け入れられていると実感できるサポートをすることで、「自己承認」することができ、「他者承認」にもつなげられると主張している。

しかし、筆者は3つの承認を大切にしながらバランスよくサポートすることは大切だが、難しいと考える。家庭の事情で、親や養育者がそばにいない状況にある場合は、「存在承認」の期待は薄く、「絶対的な自己肯定感」は身に付けられないのではないだろうか。

### 第3節 根源的自己肯定感（自分軸）

筆者は、フランクルの3つの価値を示した諸富の「実存的自己肯定感」と、教育再生実行会議第十次提言を工藤の整理した自己肯定感の3つの概念の土台である「絶対的な自己肯定感」から、互いを補い合う「根源的自己肯定感」を提言したい。

この「根源的自己肯定感」の定義として、筆者は「自分では変えることのできない状況に直面しても受け入れ、自然等を超えたものへの畏敬の念をもち、幼少期では実感として難しい存在承認、創造価値、体験価値を生きていく中で育み、自己受容を基盤にして、他者と共に互いのよさを認め合いながら自己実現していくこと」と捉えた。根源的自己肯定感は、幼少期に十分育まれることが望ましい。しかし、幼少期でなくても、いつでも誰でもスキルや

トレーニングによって自己肯定感が高まる力をもっている（自己肯定力）と工藤は主張している。

自己肯定感が世界の子供たちと比べて、低い傾向にある日本の子供たち（成人も含めて）に、他者の承認や評価である「他人軸」ではなく、自己承認や自己受容である自分の全ての「自分軸」を基にして、生きる喜びを実現していく人生こそが「根源的自己肯定感」であると考えている。この根源的自己肯定感を育むことが家庭や学校、社会、これからの日本に求められるのではないだろうか。

### 第3章 根源的自己肯定感の考えを基にした、道徳科内容項目「よりよく生きる喜び」、『論語』と『老子』の関係性

#### 第1節 根源的自己肯定感の考えからみる道徳科授業「よりよく生きる喜び」の関係性

「よりよく生きる喜び」は、第5学年及び第6学年では「よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じる」と示されている。<sup>4</sup>

「人間の強さや気高さ」を理解するためには、他者から認められたいという社会的自己肯定感（他人軸）から、自分のなすべきこと、生きる意味や崇高さを実感する自分軸をもつことのできる自己受容する「根源的自己肯定感」を育てることが大切ではないかと考える。

中学校では、「人間には、自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと」と示されている。

諸富は、「自分の醜いところや、人を恨んだり、妬んだりする気持ちも含め、ただそのまま、あるがままに認めることができる自己受容に伴って生じる肯定的感覚（実存的自己肯定感）」と述べていて、中学校の記述は、実存的自己肯定感だと筆者は捉えている<sup>5</sup>。筆者は、この感覚のあるがままを受け入れて、これらのマイナスの感覚を乗り越えようとする過程の中に、人間としてよりよく生きる喜びの実現があると考えている。つまり、ありのままの自分の存在を承認し、自己受容に基づく自己肯定感を育てることであり、内容項目「よりよく生きる喜び」は、存在承認や態度価値に迫る、筆者がいう「根源的自己肯定感」を育むことにつながると考える。

#### 第2節 根源的自己肯定感の考えからみる『論語』と『老子』の関係性

孔子の『論語』から、根源的自己肯定感を考えてみる<sup>6</sup>。

孔子の弟子たちが最も心に響いた言葉は何かを話し合った結果、「学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや」を選び、『論語』の一番はじめにおさめた。弟子たちは孔子から学び続けることで、人生のよろこびを実感し、弟子たちが最も共感し、後世に伝えたい言葉であったからである。学ぶ説びは、フランクルの創造価値の学びの実現である。体験価値の学びの実現である。また、孔子は教育の達人で、厳格な父性的存在である。『論語』の一番初めにおさめた上記の言葉は、『論語』の原点であり、「学ぶ」ことこそ、人間の人生の原点だと弟子たちは捉えたと筆者は考えた。「学ぶ」ことは、「説び」であり、「楽しみ」でもある。従って、筆者は「学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや」は人間が生きる上で、他者

<sup>4</sup> 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道徳編」70-71頁

<sup>5</sup> 諸富祥彦著『ほんものの「自己肯定感」を育てる道徳授業』明治図書 2013年 13頁

<sup>6</sup> 井出 元監修『「論語」にまなぶ人間の品位』ポプラ社 2012年 2-3頁

から承認される(他人軸)ために学ぶのではなく、学び続ける自分を受け入れる「自己承認」(自分軸)であり、自分という存在を受け入れる根源的自己肯定感であると考え。孔子は、天から与えられている使命、つまり天命を自覚して、自分軸をもっている。この自覚や自分軸は、筆者が考える根源的自己肯定感にまで辿り着くのではないだろうか。

次に老子の『老子』から、根源的自己肯定感を考えてみる<sup>7</sup>。

『老子』の「上善は水の若し。水は善く万物を利して而も争わず。衆人の悪む所に処る。故に道に幾し。」(第八章)で、「最上の生き方とは水のような生き方」であると老子は述べている。「上善」とは、最高の「善」であり、当時の乱世における「善」とは、穏やかで「平和」なことである。これこそが「上善」であり、最高だという。「善」はフランクルの態度価値であり、乱世の窮状に対して水のような生き方を実現する。また、老子は人生の達人であり、温かく包み込む母性的存在である。そこで、筆者が考える老子という人物は、争いを決して好まず、自然や生命、人間を超えた畏敬の念をもつ人柄であろう。また、老子の自然体で全てを受け入れる生き方は、諸富がいう実存的自己肯定感だといえるのではないか。さらに、自然や社会の中で、ありのままの自分の存在を受け入れる生き方は、教育再生実行会議の提言や工藤が整理した絶対的自己肯定感だといえるのではないか。老子という人物は、生没年不詳で、実在していたかも確定していない。しかし、筆者は『老子』の思想から、『論語』のように理性で学問や教育を修得するのではなく、感性で直感的に体得する超越的なもので、計り知れない状況でも受け入れることができる、人知を超えた根源的自己肯定感の生き方ではないかと考える。

### 第3節 根源的自己肯定感の考えを基にして、『論語』と『老子』の思想からみる道徳科 内容項目「よりよく生きる喜び」との関係性

以上、『論語』と『老子』について述べたが、両著とも「生きること自体」に肯定的で生きることへの応援歌であり、苦しさも含めて、生きることへのプラス思考で書かれている。

孔子にとって、「道」を求めることは人生の究極の目的であった。老子は「道の道とすべきは常の道にあらず」(世間一般に説かれている道は「真実の道」ではない)と断言した(第一章)。孔子も老子も共に「道」を求めて、人生を苦しみながらも前向きに送った。孔子と老子に共通しているのは、「人間は、弱さや醜さをも受け入れながら、もともとは強い意思をもち、優しさと善意をもっていると確信し、人間に対する絶対的な信頼を懐いている点」である。筆者は、『論語』と『老子』は人間が生きる上で、「よりよく生きる喜び」をもつことであり、幸せになる思想だと捉えている。『論語』や『老子』を通して、「よりよく生きる喜び」を実感として児童生徒の心に灯がともり、その灯が根源的自己肯定感として静かに燃え続けてほしい。この根源的自己肯定感の明かりを灯し続けることで、「well-being」の精神である幸福感につながってほしいと考える。

## 第4章 根源的自己肯定感を基にした2つの教材開発

### 第1節『論語』の思想を基にして開発した教材「失敗から生きる説びへ」

この教材は、父と子の会話形式で構成されている。生きる上で、一番素晴らしいよこび

<sup>7</sup> 井出 元監修『「老子」にまなぶ人間の自信』ポプラ社 2013年 50-53頁

は何かの子の質問に、父は学びで分かったことや初めてできたことが「説び」だと応える。しかし、誰にでも失敗や間違いがある。諦めた時こそ、本当の間違いである。この失敗や間違いから多くを学び続ける人こそ、生きる説びをもつ人だと、子に語るという内容である。3つの篇を基にして、教材化した。この教材の詳細は、北村の修士論文に記載されている。

### 1 学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。(学而篇)

「手とり足とりしておそわったことをくりかえし練習し自分のものにする、こんなうれしいことはありません」<sup>8</sup>

道徳科内容項目「よりよく生きる喜び」には様々な「よろこび」がある。様々な「よろこび」の中でも、最も素晴らしいよろこびは「説び」だと孔子はいう。初めてできたよろこびをかみしめた「説び」の原体験は、確かな自信に結びついた成功体験である。これは、他者からの評価ではなく、自分の失敗を自分の力で乗り越えた体験だからこそ、確かな自己評価であり、自己受容である。この「学ぶ説び」の体験は、フランクルの体験価値であり、教育再生実行会議提言や工藤が整理した「自己受容による自己肯定感」である。そして、「学ぶ説び」は根源的自己肯定感を築く要素になる。この「学ぶ説び」を子供たちに思い起こさせて、味わわせたい。人生はこのような「説び」の連続で、たくさんの「説び」が子供たちの学びの体験として蓄積されて、根源的自己肯定感が育まれるよう、大切にしたい一節である。

### 2 人の過つや、各々其の党(たぐい)に於いてす。過ちを觀て斯に仁を知る。(里仁篇)

「人はそれぞれ自分の程度に応じた間違いをおかします。そして過ちの内容をよく観察すると、その人が思いやりのある人間かどうか分かるのです」<sup>9</sup>

過ち、つまり、失敗は誰でもするが、失敗した時こそ、その人の本来の姿が見えるという。ある者は、自分の失敗を他者や環境のせいにしてたり、自暴自棄に陥ったりすることもあるだろう。井出は、『仁』とは人に対する思いやりの心のことで、『論語』ではとても大切なもの『仁』を身に付けるには、謙虚に学び続ける姿勢が大切で、孔子が生涯をかけて学び続けたのも、思いやりの心を身に付けるため」と述べている。つまり、失敗した時こそ、謙虚に学び、人に対して思いやりをもてるかどうかでその人となりがわかるという。「謙虚な学び」から「学ぶ説び」に気付くようにしたい。失敗を受け入れる勇氣は、つまり、フランクルがいう窮状に対してとる態度によって実現される価値である「態度価値」と短所を冷静に受け止める「自己受容の自己肯定感」であり、これらを補い合う根源的自己肯定感につながると考える。

### 3 過ちて改めざる、是を過ちと謂う。(衛霊公篇)

「間違いをおかしたのにそれをなおそうとしない、それがほんとうの間違いです」<sup>10</sup>

井出は、この言葉に『論語』で教えられている「間違い」や「学び続けること」についての考えが詰まっているという。間違いをしたのに、間違いと認めなかったり、いつまでも失敗したことに対して、くよくよしたりしていることがほんとうの間違いだと述べている。大

<sup>8</sup> 井出 元監修『「論語」にまなぶ人間の品位』ポプラ社 2012年 116-119頁

<sup>9</sup> 同上 40-43頁

<sup>10</sup> 同上 44-47頁

切なのは、その間違いを「あらためる」ことであり、間違いは人を成長させてくれるチャンスだとも述べている。チャンスを逃さず、学び続ける人は間違いからたくさんを学ぶことができるという。そこで、筆者は2の里仁篇の一節から、謙虚に学ぶことは、他者への敬意があること、他者からの愛情や思いやり、励まし等で支えられていること、自分の失敗に気づき、短所も受け入れられることと捉えて、謙虚に学ぶことで「自己受容に基づく自己肯定感」が生まれると考える。

以上の3つの各篇の一節から、フランクルの3つの創造価値、体験価値、態度価値の「実存的自己肯定感」と教育再生実行会議の提言や工藤が整理した「絶対的な自己肯定感」が育てられると考える。これら2つの自己肯定感を補い合うような、筆者が考える根源的自己肯定感につながれるのではないだろうか。

筆者が以前行った都内小学校6年生120名への自己肯定感に関するアンケート結果<sup>11</sup>から、自己肯定感の高い傾向児童（自尊感情、自己有用感、自己効力感、自己有用感、実存的自己肯定感の全てAの自己評価）は、自分に自信や意欲に満ちていることがわかった。しかし、もし失敗したらどうしよう、まちがったら嫌だなと不安感をもっていることもわかった。これは、他者評価による社会的自己評価によるものである。謙虚に学び続ける「説び」である根源的自己肯定感にまで、掘り下げられるような教材開発と道徳科授業等を提案する。

## 第2節『老子』の思想を基にして開発した教材「自分の弱さを見つめて」

この教材は、母と子の会話形式で構成されている。子は常に友達と比較して自分の能力の無さに落ち込み、孤独に苦しんでいる。自分は自信がなくて、悶々としている。母は、じっと静かにしている姿は人間本来の姿であると慰める。決して、友達と比較する必要はない。あなたはよく頑張っている。自分の弱さと共に生きていけばよいと励ます内容である。主に、第二十章を基にして、教材化した。この教材の詳細は、北村の修士論文に記載されている。

### 1 衆人（しゅうじん）は熙熙として、太牢（たいろう）を享（う）くるが如く、春に台（うてな）に登るが如し。我は独り泊として其れ未だ兆（きざ）さず、嬰兒の未だ咳（わら）わざるが如し。（第二十章）

「多くの人は、ご馳走を受けてうきうきとし、春の日、高台に登っているかのように楽しげです。それなのに私だけは、まるでまだ笑うこともできない嬰兒のように、たった一人でひっそりとして、鎮まりかえってじっとしています」<sup>12</sup>

他者と比較して、自分は沈んでいる。他者評価等に基づく社会的自己評価を低くしている。自分の短所を今は受け入れることもできない自分がある。いわば、自己受容に基づく自己評価ができない状態である。マイナスの体験価値であり、もちろん創造価値もみられない。

### 2 衆人は皆余り有るに、而るに我れは独り遣（うしな）えるが若し。（第二十章）

「多くの人は誰もが有り余るほど活力に満ちているのに、自分だけが静まり返って本来の

<sup>11</sup> 北村 博 自己肯定感を育てる－『論語』と『老子』からみる「よりよく生きる喜び」の道徳科授業等を通して－麗澤大学大学院修士論文、2021年3月 14、15、28頁

<sup>12</sup> 井出 元『人生に生かす老子』致知出版 2011年 103頁

自分を失い、気力もなく意気消沈し、孤立感にさいなまれています」<sup>13</sup>

前出の1の1節に引き続き、マイナスの状態を引きずっている状態である。この状態からさらに深く根源的な欲求である、親からの愛情、あるいは親に代わる身近な人からの愛情や励まし、心からの寄り添いを求めている状態である。自己肯定感の土台である根源的自己肯定感を求めている。

### 3 俗人は昭昭（しょうしょう）たり、我れは独り昏昏（こんこん）たり、俗人は察察（さつさつ）たり、我れは独り悶悶（もんもん）たり。（第二十章）

「周りの人は皆きらきらと輝いているのに、自分だけが独りぼんやりとしているように感じることがあります。周りの人は皆賢くて物事をはっきり認識しているのに、自分だけが物事に精通しないで独りもやもやしています」<sup>14</sup>

ここでもまだ、他者との比較に苦しんでいて、かなり、落ち込んでいる状態である。低い自己肯定感（自己否定）の境地であるが、この焦りや落ち込みは人間として生きている証拠であり、この姿を受け入れることで、人として成長するきっかけにつながる。

### 4 我れは独り人に異なり、而して母に食（やしな）わるるを貴（たつと）ぶ。（第二十章）

「私一人、他の人とは違っているようですが、母に懐かれ、私なりに懸命に自然体で生きていきたいのです」<sup>15</sup>

ここで、はっきりと母親（父親）の愛に抱かれたいと求めている。そして、自分らしさを出して、自分らしく等身大で自然体として、生きていきたいと願っている。やっと本来の自分らしさの大切さに気が付いている。母親からの愛情を受けた絶対的な自己肯定感を求めている。

筆者が以前行った小学校6年生の自己肯定感に関するアンケート結果（11前出）から、自己肯定感の低い傾向児童（自尊感情、自己有用感、自己効力感、自己有用感、実存的自己肯定感の全てDの自己評価）は、友達と比較して、劣等意識をもったり、自分の弱さや醜さなどの短所を嫌ったりして、自分を受け入れられず、否定的にみてしまうことがわかった。そんな自分を他者と比較せず、自分の弱さや醜さを個性として受け入れる「自己受容に基づく自己肯定感」と、フランクルの3つの価値を構成する「実存的自己肯定感」が補い合う根源的自己肯定感が育つ教材開発と道徳科授業等を提案する。

## 第5章 ここまでのまとめと今後の課題

### 1 これまでのまとめ

（1）令和元、2年度の筆者の修士論文の課題であった諸富の「実存的自己肯定感」であるフランクルが見いだした創造価値、体験価値、態度価値を検討した。また、教育再生実行会議や工藤が整理した自己肯定感の3つの概念の特に、親の愛情を受けて自分の存在を肯定された「絶対的な自己肯定感」と「自己受容に基づく自己肯定感」を十分に育

<sup>13</sup> 同上 104頁

<sup>14</sup> 同上 104-105頁

<sup>15</sup> 同上 108頁



## 研究ノート

めば、たとえ「他者評価等に基づく自己肯定感」が揺らいでも、自分を見失うことはないと考えた。

(2) 「実存的自己肯定感」と「絶対的自己肯定感」のそれぞれのよさを補い合い、「根源的自己肯定感」を提言した。そして、この「根源的自己肯定感」を基にして、『論語』と『老子』の思想、道徳科内容項目「よりよく生きる喜び」との関係性を検討した。

(3) 『論語』の思想を基にして開発した教材「失敗から生きる説びへ」と『老子』の思想を基にして開発した教材「自分の弱さを見つめて」に対して、「根源的自己肯定感」の視点で検討した結果、他者との比較や社会的自己肯定感ではなく、自分の弱さや醜さを個性として受け入れる「自己受容に基づく自己肯定感」の構成で教材開発したことを再認識することができた。

## 2 今後の課題

(1) 筆者の修士論文での授業実践を見直して、「根源的自己肯定感」を基にした、子供の学習の様子や記述したワークシートの新たな分析と考察をする。特に、自己肯定感の高い傾向児童と低い傾向児童の学習の様子とワークシートの記述の見直しをする。

(2) これからの道徳科授業等でどのようにしたら、「根源的自己肯定感」を育てられるかを子供の成長の発達段階に応じて提言する。特に、「自分軸」とは何かを明らかにするとともに、この「自分軸」を育てるにはどうしたよいかを提言する。具体的には、道徳科授業をはじめ、各教科等でも「自己肯定力」を高めるスキルやトレーニングを取り入れた体験的な活動を提言する。

(3) 『論語』の思想を基に教材開発した「失敗から生きる説びへ」と、『老子』の思想を基に教材開発した「自分の弱さを見つめて」について、「根源的自己肯定感」の観点から、さらに再検討、整理する。

## 参考文献

- ・ 北村 博『自己肯定感を育てる－〔論語〕と〔老子〕からみる「よりよく生きる喜び」の道徳科授業等を通して－』 麗澤大学大学院修士論文、2020年3月
- ・ 諸富祥彦著『フランクフル心理学入門 どんな時も人生には意味がある』コスモス・ライブラリー 2013年
- ・ 一般社団法人「日本セルフエスティーム普及協会」 『自己肯定力認定トレーナー養成コース』同会発行 2021年
- ・ 内閣官房教育再生実行会議担当室 教育再生実行会議第十次提言 2017年6月

## 研究ノート

- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編」
- ・ 文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編」
- ・ 諸富祥彦著『ほんものの「自己肯定感」を育てる道徳授業』明治図書 2013 年
- ・ 井出元著『人生に生かす老子』 致知出版 2011 年
- ・ 井出元監修『10 代から読む中国古典『論語』にまなぶ人間の品位』ポプラ社 2012 年